(3)貸借対照表　貸借対照表は、一定時点(決算日)における資産、負債、基本金の内容と在高を明示して、学校法人の財政状況を明らかにしています。

貸借対照表　令和7年3月31日

（単位：百万円）

資産の部 科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	9,009	9,424	△ 415
有形固定資産	8,171	8,589	△ 418
土地	1,021	1,023	△ 2
建物	5,515	5,857	△ 342
構築物	333	365	△ 32
教育研究用機器備品	331	371	△ 40
管理用機器備品	35	42	△ 7
図書	936	929	7
車両	0	2	△ 2
建設仮勘定	0	0	0
その他の固定資産他	839	835	4
有価証券	20	20	0
退職給与引当特定資産	300	300	0
減価償却引当特定資産	100	100	0
施設設備引当特定資産	226	226	0
第3号基本金引当特定資産	177	177	0
教育活動寄附金引当特定資産	12	7	5
流動資産	649	739	△ 90
現金預金	453	581	△ 128
未収入金	163	124	39
有価証券	0	0	0
仮払金他	33	33	0
資産の部合計	9,658	10,163	△ 505

（単位：百万円）

負債の部 科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	1,329	1,375	△ 46
長期借入金	1,022	1,078	△ 56
退職給与引当金	302	297	5
長期未払金	5	0	5
流動負債	522	529	△ 7
短期借入金	56	56	0
未払金	35	44	△ 9
前受金	327	389	△ 62
預り金	105	40	65
災害損失引当金	0	0	0
負債の部合計	1,851	1,904	△ 53

純資産の部 科目	本年度末	前年度末	増減
第1号基本金	15,068	15,062	6
第3号基本金	177	177	0
第4号基本金	181	181	0
基本金の部合計	15,426	15,420	6
翌年度繰越収支差額	△ 7,619	△ 7,161	△ 458
繰越収支差額の部合計	△ 7,619	△ 7,161	△ 458
純資産の部合計	7,807	8,259	△ 452

負債及び純資産の部合計 科目	本年度末	前年度末	増減
負債及び純資産の部合計	9,658	10,163	△ 505

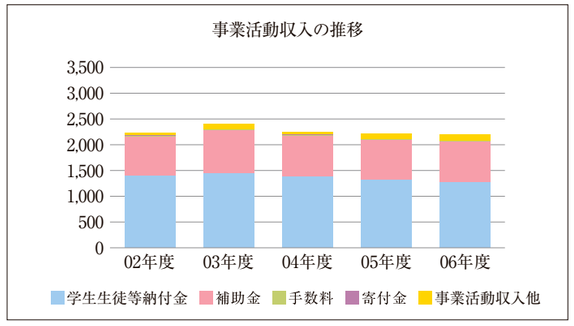
令和6年度末における固定資産(土地・建物・機器備品・特定資産他)と流動資産(現金預金・未収入金他)を合わせた資産の部合計は9,658百万円で、建物・教育研究用機器備品の償却等や現金預金の減少により、前年度末と比べて505百万円減少しました。

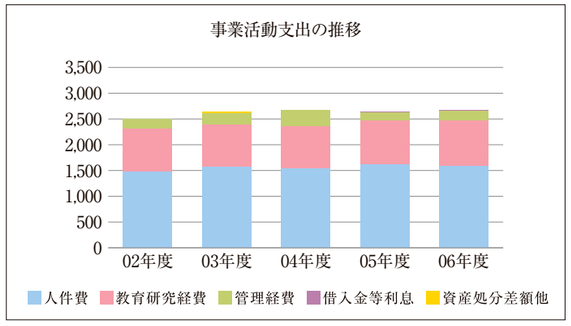
一方、長期未払金等の固定負債と前受金及び未払金等の流動負債の合計額は1,851百万円となり、前年度末と比べて53百万円減少しました。これは長期借入金の減少が主な要因です。

事業活動収支の推移

（単位：百万円）

収入の部	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
学生生徒等納付金	1,389	1,443	1,380	1,308	1,273
経常費等補助金	758	826	786	775	775
手数料	22	20	20	18	18
寄付金	3	2	2	9	7
付随事業収入＋雑収入	55	106	62	103	125
事業活動収入計	2,236	2,413	2,260	2,218	2,208
基本金組入額合計	△ 532	0	△ 554	△ 38	△ 5
支出の部	**令和2年度**	**令和3年度**	**令和4年度**	**令和5年度**	**令和6年度**
人件費	1,473	1,560	1,532	1,602	1,582
教育研究経費	818	826	820	855	869
管理経費	186	208	299	163	201
教育活動外支出	2	4	6	8	8
特別支出	0	27	5	0	0
事業活動支出計	2,478	2,625	2,662	2,629	2,661
基本金取崩額	0	147	0	0	0





2. 事業の概要

学校法人 尚絅学園

(1)ガバナンス

①私立学校法改正に伴う寄附行為の変更に対応し、令和7年4月1日施行の寄付行為改正を行った。
②常勤理事会を原則隔週で開催し、重要事項の協議検討、意思決定等を適切に行うとともに、業務遂行状況の把握を行った。
③「令和6年度危機管理プログラム」に基づき、こども園は毎月1回避難訓練を実施し、大学・短大・中高については、令和6年10月に両キャンパスとも避難訓練(実動訓練)を実施した。

(2)財政

①設置校別・部門別に収支状況を把握するとともに、損益分岐点(学生・生徒・園児数)を分析し、全教職員に情報共有し、今後の募集活動の材料とした。
②厳格な予算執行及び予算統制のため、稟議において適正な予算執行であるかを検証し、また伝票回覧時に予算執行状況の正確な把握に努めた。

(3)人事

①効率的な事務組織の再編を検討し、令和7年4月に尚絅学園事務組織規程の改正を行い、組織改革を行った。
②尚絅学園事務職員の初任給、昇格、昇給等に関する規程を制定し、令和6年4月から施行した。
③FD活動は「授業改善アンケート」「FD研修会」など年間7回実施し、SD活動は、「決算書について」「一次救命処置」など、研修会を年間10回実施した。

(4)施設設備

①令和6年8月に各キャンパスの空調機器の一斉調査を行い、故障している空調機器について修繕を行った。
②武蔵ヶ丘キャンパス遊休土地の売却について、入札を経て落札業者と不動産売買契約を締結した。

(5)同窓会・後援会・地域との連携

①設置校の担当部署が各サークル、部活、同好会からの課外活動支援金の申請を受付け、申請のあった団体へ交付した。
②志願者数の増加に加え、同窓会組織との連携強化につながる新たな奨学金制度(二世代・三世代入学奨学金)を制定し、該当世代へ案内を送付した。

尚絅大学・尚絅大学短期大学部

(1)教育と学修の充実

①建学の精神、教育理念に基づく自校教育の推進のために、大学・短大の全学科において自校教育の授業を実施し、受講生に理解度アンケート調査を実施した(理解度98%)。その調査結果と学修効果を学科会議及び教務連絡協議会等で検証を行い、全学で共有した。
②教育方法及び教育体制の継続的な点検・改善を図るために、学科会議及び教務連絡協議会等で3つのポリシーの点検及び必要に応じた改善を行った。また、教育課程及び学修成果の点検のために、授業改善アンケート結果について学科会議及び教務連絡協議会等で検証を行った。
③学修成果の獲得及び教育の質保証を高めるために、自己点検・評価活動を継続的に実施し、課題の抽出・検証を行った。また、学修成果の可視化を推進し、学科会議や教務連絡協議会等でその検証を行った。
④社会の要請や変容に適応した教育の導入や推進を図るために、教育改革に取り組む教員への学長裁量経費の配分や「数理・データサイエンス・AI教育入門」への取り組みの強化、アクティブ・ラーニングの導入率向上やDXを取り入れた教育体制の整備等を実施した。
⑤大学と短期大学部との連携による教育の推進については、大学と短期大学部との合同開講科目を開講し、更に新規科目等の開講を検討している。大学短大併設の強みの発揮できる編入学制度をより活用できるように短大の授業科目を整備した。

(2)学生確保

①入学者の増加策として令和7年度入試においては、総合型選抜(第1回)にエントリー方式を導入した。さらに、編入学選抜における受験者の増加を図るため、こども教育学部及び生活科学部の編入学試験の時期や回数の見直しを行った。
②オープンキャンパスの実施内容においては、オープンキャンパス参加者を受験希望者へとつなげるため、本学の学びの説明や、個別の受験相談に応じるなど、フォローアップを重視した内容とした。
③広報手段としてラインやインスタグラムなど、SNSを活用した直接の訴求できる情報発信手段を活用した広報活動も実施した。

(3)学修環境の整備

①校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理を図るため、九品寺キャンパス及び武蔵ケ丘キャンパスの教室、図書館、実験室等において機器の設置や空調機交換などの改修・修繕を実施し適切な教育環境の維持を行った。
②夏季に併設校である中学・高等学校の空調機が故障したため、大学の施設を提供した。これをきっかけに今後の内部進学率向上にもつながる機会となった。
③図書館の整備改善の一環として、研究紀要に掲載された論文等の電子化と公開を行うとともに、電子書籍サービス(69タイトルの追加)と新聞記事データベース(「熊本日日新聞記事データベース」)を新たに公開した。

(4)学生支援の充実

①学生生活における学生満足度については、「学生生活に関する実態調査」「疲労蓄積度調査」などの各種アンケート調査の結果を学部学科に還元し、その調査・分析結果を全学で行う委員会等で共有した。
②特別な配慮を要する学生については、学生からの支援申請に基づき学部学科と協議を行い、障害の状況等に応じた支援を行った。家計急変等に伴う経済的な問題については奨学金の申請や納期の相談等、個別事案ごとに対応した。
③キャリア支援・就職支援については、「夏季キャリアガイダンス」では、就職年次(大学3年生・短大1年生)向けの従来プログラムに加え、就職年次以外(大学1・2年生)向けの講座を新設し、早期からの就職意識の醸成を図った。「春季キャリアガイダンス」では、就職年次の保護者を対象とした説明会を新設し、保護者の意向も踏まえた就職指導を実施した。また、職種別の「就職懇談会」を開催し、事業所からは有意な取り組みとして評価を得た。
④インターシップについては、大学コンソーシアム熊本主催のインターンシップに参加し、夏季には10先の事業所に28名(大学18名、短大10名)、春季には4先の事業所に8名(大学4名、短大4名)が参加した。
⑤令和6年度卒業生の就職率は、大学97.0%、短期大学部99.4%であった。

(5)研究力の強化

①研究倫理遵守活動の推進については、研究倫理に関する諸規定の見直しや研究倫理教育の実施、不正防止計画の策定等を計画的に実施しており、研究倫理研修の受講についても対象者全員が研修を受講した。
②研究環境の充実については、研究設備・機器等の導入、更新及び整備として、凍結乾燥機、ブリクサー 、フードブレンダーなどの機器を導入した。
③研究成果発表の推進については、本年度の研究論文の公表は84件で目標を達成した。食育研究センターと子育て研究センターは共同で県内6園の協力を得て、「かみかみプログラム」を実施し、大学・保育所・家庭が連携して噛む力・飲み込む力の向上を目指した。

(6)社会連携の拡充

①地域連携事業については、地域連携推進センターでは、継続中・新規の地域連携事業を33件推進した。令和7年2月に、「くまモン学研究会」を開催し地域とのネットワークの強化を図った。
②食育研究センターでは、天草地区漁業士会と連携し、「尚絅食育の日」を開催し、交流活動を通じて魚食普及に取り組んだ。
③子育て研究センターでは、保育の質向上と保育者の早期離職防止を目的に相談支援・交流会「保育Café」を毎月開催した。また、地域の子育て支援として「子育てCafé」を毎月開催した。

(7)国際交流の推進

①新たな取組として、こども教育学部こども教育学科は釜山大学校師範大学幼児教育学科と交流協定を締結し、令和7年1月釜山大学校から学生11名と教員1名を受入、交流を深めた。さらに、両学科の教員間の共同研究も進行している。
②ハワイ大学マノア校への短期語学留学が新設され2名の学生が参加した。

(8)内部質保証

①内部質保証については教育水準の向上、学修成果の可視化とアセスメント体制の整備、調査データの分析に基づくPDCAサイクルの徹底、学生ニーズを踏まえた課題解決への取り組み、内部質保証システム体系図に基づいた自己点検・評価及び事業実績の検証等を行い、改善策の実施に取り組んだ結果、令和6年度大学機関別認証評価にて一定の評価を得た。
②調査データの学内共有を図るため、大学IR支援サイトを構築し、教職員間での情報の共有を可能とした。

尚絅中学校・高等学校

(1)教育の質向上

①全校生徒の英語力向上の数値目標達成は特別進学コースのみだが、英語ディベートでは県並びに九州大会で優勝して全国大会に出場し、全国大会ではチームの一人が最優秀ベストアタッカー賞を受賞した。
②国際交流の一環として7月に台湾からの訪問団58名を受け入れ、中学生と吹奏楽部との交流と文化祭への参加を実施した。姉妹校の韓国鶴城女子中学校とは、1月にオンラインによる交流を行った。
③本校独自の留学規定を4月に作成し、中期１名(ニュージーランドに半年)、長期1名(イタリアに10ヶ月)が留学した。また、フランスより1年間、ベルギーより3ヶ月の留学を受け入れた。

(2)品性があり社会に貢献し得る生徒の育成

①プレゼンテーションやディスカッション等の活動を実施し、全国大会のディベート甲子園、英語ディベートに出場した。また、特別進学コースがエナジード・サミットの全国大会に出場し、表彰4つの内の一つ「気づき賞」を受賞した。
②総合進学コースからの尚絅大学・尚絅大学短期大学部への進学率は目標の40%を下回り37%であった。また、特別進学コース、中高一貫コースにおける国公立大学及び難関私立大学への合格者数は目標の15名を下回り11名となり、達成率は73%であった。
③学校評価に関わる生徒・保護者アンケートの「進路指導が適切に行われている」の肯定評価は生徒85%、保護者77%であり、目標値の80%以上は達成できなかった。

(3)生徒支援の充実

①高校では、本年度進級に伴う奨学生採用において4年振りに2名の生徒が奨学生SSに昇格した。
②全教職員が支援を必要する生徒への過不足のない指導・支援を実践するため、熊本県立教育センターから講師を招いて特別支援教育に関する研修を実施した。
③在校生と育友会及び同窓会が連携した現状報告会は実施できなかったが、本年度から文化祭1日目に実施するクラス及び委員会・部活動の発表には育友会と同窓会にも案内し、観覧できるようにした。

(4)地域貢献の推進

①本年度はペットボトルキャップ回収、マチノガッコウ2024、熊本城マラソン、フードバンク熊本のボランティア活動に加え、新たに認知症サポーター養成、きくなんフェスタ、アイシティECOプロジェクトのボランティア活動に生徒たちが主体的に参加した。
②地域自治会との連携はできなかったが、日本財団が推進する海洋ごみ対策事業の一つであるスポGOMI甲子園2024熊本大会に部活動生が初めて参加した。
③地元商店街の活性化や熊本の水質保全を目指す探究プログラムに参加した。また、中高一貫コース高2が東京のNPO「せいほ」と連携して、マラウイの小学校の給食支援のためのコーヒー販売を下通繁栄会の協力を得て実施した。

(5)個性豊かな生徒の確保

①在籍生徒の実態から、訪問する学校の地域見直しと管理職と職員が訪問する学校の区別化を行うとともに、合志市、菊陽町、大津町、御船町など人口増加エリアにある学習塾への管理職による広報活動を行ったが、目標数であった高校220名、中学30名には及ばなかった。
②生徒に関する情報共有研修は実施できたが、困り感が見受けられる生徒に対する具体的な対応や支援方法についての保護者との連携が不十分であり、高校の転退学者が18名となり、目標値の達成には至らなかった。
③校則については柔軟な対応に変更してきているが、まだ生徒と教職員に温度差が見受けられる。制服については、次年度から夏服着用期間のオプションとしてのポロシャツと時代の変化と機能性の面から、夏用・冬用のスラックスを導入することとなった。

尚絅大学附属こども園

(1)子どもの健やかな成長のための教育・保育の充実

①園の環境を活用し園児の発達や興味、季節等を配慮して教育・保育を計画的かつ創造的に実践することができた。特に、本園の自然環境を生かした教育保育活動と遊びの中に組み込まれている「食に関する活動」は、試食体験やバザーでの収穫野菜の保護者への販売等、保護者から高い評価を得た。
②DX化の推進では、ICT支援システム「コドモン」導入2年目となり、園児の出欠管理やバス運行状況、お知らせ、写真による怪我の状況報告などの利用を通して、保護者とのコミュニケーションが以前より円滑になった。
③年長児が見通しをもって入学できるように、ひらがな遊びや武蔵ヶ丘北小学校1年生と年長児の交流を実施した。

(2)子育て支援の充実

①在園児保護者への支援は、「子育て相談会」「お誕生会」「親と子のつどい」などが好評だった。特に昨年度までの「おしゃべり広場」を発展させた「おしゃべりカフェ」は好評だった。
②子育て支援ルーム「どんぐり」の活動では、制作やリトミック、知育ヨガ、講話など様々な活動を準備し、参加者からはとても好評だった。

(3)次世代保育者の養成

①これまでの短期大学部だけでなく大学(子ども教育学部)との実習連絡会などを通して実習生の情報共有や「実習のしおり」を通して実習の指導内容の共通理解に努め、実習生にとって充実した教育実習につながったと考える。
②「運動能力測定」を大学と連携して行ったり、幼児教育学科の授業の一環として絵本の読み聞かせやストレッチ体操などの活動を行ったりして、学生の教育・保育力向上に寄与することができた。
③高校生、幼児教育学科、大学生の教育実習、自主自習だけでなく、中学生の保育体験なども積極的に受け入れ、附属園としての役割を果たすことができたと考える。

(4)自然豊かな園庭で伸び伸びと遊ぶ園児の確保

①令和6年度の入園希望者の状況では前年度の希望者数とほぼ変わらず、収支の均衡はとることができた。令和16年度スタート時は、258名だったが、途中入園者が多く、最終的には284名に達した。令和7年度のスタート時は0歳児が少ないものの途中入園の希望者も有り、ほぼ今年度並みの見込みである。
②昨年度、保護者に「園児募集に関するアンケート」をとり、その結果をもとに職員全員で方策を協議し、今年度以降の対策を立て取り組んだ。
③尚絅学園HP「お知らせ欄」等で、本園の魅力や園児達の姿の情報提供を積極的に行った。